

伝説

大悲山大蛇物語の背景

前書

伝説とはその土地に深く根ざした物語で、親から子、孫へと、代々に亘り語り継がれて来たドラマである。口承であるから、その途中において、面白おかしく脚色されて来た事は亦いがめない。かかるゆえんをもって、伝説は骨董無稽の物語として一笑に付される。だがその伝説をよく咀嚼して玩味すると、その中に一片の真実が秘められている事が多い。このような観点に立ち、大悲山大蛇伝説の背景を探り推測してみる。

一、大悲山大蛇伝説の時代背景

手許の「宝曆十二壬午年八月十二日写 大悲山大蛇記」編者及び書写人不明（ヘコピー）の書き出しに「時は永正元年（一五〇四）三月とあるが、登場人物が相馬光胤公とあるので、建武年間（自一三三四〜至一三三七）の出来事であったろう。

その頃中央では、後醍醐天皇の御倫旨を奉じた武士団が鎌倉幕府を倒し、天皇親政の道を開き、建武と改号したが、間もなく足利尊氏が反逆した。そこで天皇は、義良親王を奉じて多賀城（宮城県）に駐在していた。国司北畠顕家卿に尊氏討伐の令を下した。卿は勅を奉じ、建武二年十二月、奥州の王朝軍を率いて遠征の途に上る。この中に標葉郡（現浪江・双葉・大熊の三町）領主標葉持隆公も部下の将兵と共に参加し、留守の請戸城は、弟隆光公を将とした留守隊が固めていた。